

みる つくる
かたる

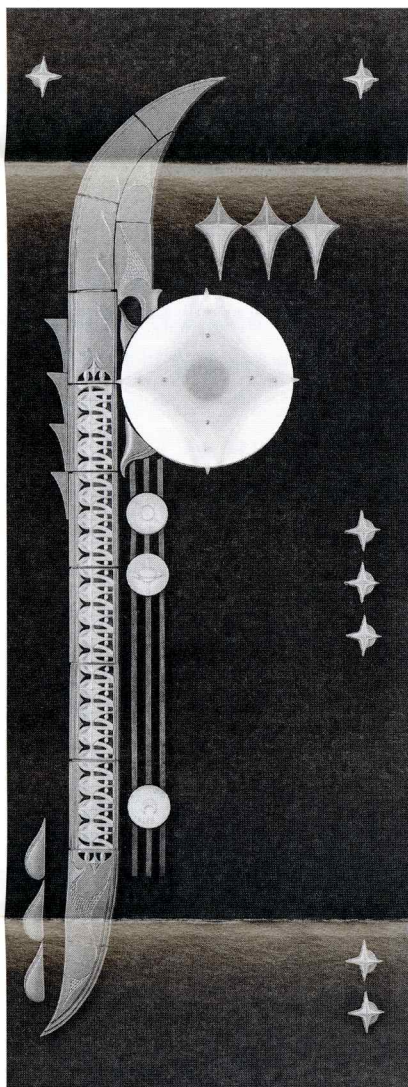
2005



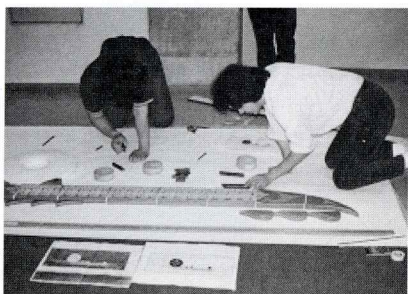
VOL.32
NO.2 (通巻92号)

ART NEWS 千葉県立美術館報

企画展 近代陶芸の精華 宮之原 謙



《壁面照明銀河》 昭和6年第12回帝展出品（復元完成品）



復元作業中の様子 平成5年

昭和4年、宮之原謙は《赤鉄結晶釉竹文壺》で帝展に初入選し、翌年《壁面照明太陽》、さらに6年の第12回帝展にこの《壁面照明銀河》を出品し特選を受賞した。宮之原33歳の時の作品である。太陽、銀河と命名されたふたつの壁面照明の作品は、いずれも宇宙をテーマとしている。宮之原がこののち宇宙や星を題材にした作品を晩年まで制作し続けたのは、麻布中学時代に教わった英語教師、野尻抱影の影響によるものといわれている。野尻抱影は英米文学者であるとともに、天文に関して造詣が深く、『星座巡礼』などをはじめ星に関する著書も多い。

宮之原が帝展に出品し始めた昭和初期は、日本にも直線と曲線を自在に配したアール・デコ様式が流行し、工芸をはじめ建築や家具などの装飾に用いられた。この作品にもアール・デコ様式の傾向が見受けられる。また、早稲田大学建築科に在籍した頃の宮之原は、製図に熱中したという。とりわけこの《壁面照明銀河》の構成は、そうした宮之原の建築的素養を十分に感じさせる作品である。

戦前、この作品は東京の蒲田にあった自宅の玄関内に保管され、来客の目に触れる場所に立てかけてあったという。その後、コレクターの手にわたり、戦時中は部材をすべて分解し、これを油紙につつんで地中に埋めて戦火を逃れたという逸話が伝えられている。厚手のビロードを張った土台は、この時廃棄されたものであろう。自宅は空襲により灰燼に帰し多くの作品も失ったが、幸いにして手を放れていたこの作品は、分解されはしたものの現在に伝えられることになったのである。

平成3年、当該作品が本館に寄附され、これを受けて宮之原謙の良き制作パートナーであった初子夫人の助言を得ながら平成5年から復元作業を行うことになった。残っていた部材は陶製品、木材、ガラス、止め金具類で、このうちガラスの破損と木材が欠落していたため、写真や残った素材とを参考に欠損部分を作り直した。なお、彫文を施し結晶釉で焼成された主要部分をはじめ、すべての陶製品が完全に残っていたことは幸運であり、復元には不可欠であった。太陽や月、土星などをデザイン化して配し、中ほどの連鎖文の透かし彫りは天の川を表現したものであろうか。雄大な大宇宙に夢をはせて表現した作品らしく、高さは約3メートル近くあり、厳かであり神秘性に満ちている。

（金田雅成）

企画展 近代陶芸の精華 宮之原 謙

宮之原謙（明治31～昭和52年）は、昭和初期に工芸部門が設置された官展（帝展や日展など）を主舞台に活躍し、斬新な装飾と卓越した技術によって陶芸界に新風を吹き込んだ作家のひとりである。

宮之原が陶芸家となったのは、早稲田大学建築学科を病氣中退したあと、銀行家の父親が息子の健康恢復を願い、かねてから昵懇であった横浜の真葛焼で知られた二代宮川香山に弟子入りさせたことによる。この時宮之原は25歳、陶芸家をめざすには遅い出発であった。昭和2年、陶土や釉など陶芸制作に恵まれない関東に在住する陶芸家たちの親睦や展覧会開催を目的として東陶会が創立され、宮之原も参加する。宮之原は、ここで板谷波山に直接接して薫陶を受け、この後の作品と、陶芸家としての生き方に大きな影響を受けた。

昭和4年、帝展に初入選し、以後官展を中心に作品を発表する。昭和32年には、日展に出品した《陶製花瓶(空)》が日本芸術院賞を受賞し、日展の主要な作家として活躍した。

千葉県との関わりは、昭和23年から松戸市に移り住んで作陶活動を行ったことにはじまる。特に、県展に出品するなど県内の陶芸の振興に寄与し、昭和45年千葉県文化功労者となっている。



《象嵌磁泰山木節壺》 昭和30年 鹿児島市立美術館蔵

宮之原の代表的な技法は、彩磁と象嵌である。彩磁への取り組みは板谷波山の影響によるものであるが、宮之原の彩磁は、波山が手がけた薄肉彫りと液体顔料による彩磁とは異なり、彩土を何層にも重ねて文様を

描く彩盛磁や、鉄分の多い色土に釉薬を混ぜて描画する釉彩を行っている。また象嵌は素地への象嵌とともに釉薬の中に別の釉薬を埋める釉象嵌が知られ、いずれも緻密で丹念な仕事求められる。

本展覧会では、松戸に在住し日本陶芸界の逸材・宮之原謙の初期から晩年までの代表的な作品109点を紹介し、宮之原の作品と創作活動の全貌を紹介する。

また、併せて師の二代宮川香山、板谷波山の作品各2点を展示する。

会 期：平成17年11月26日（土）

～平成18年1月22日（日）

開館時間：午前9時～午後4時30分

休館日：月曜日（ただし、1月9日は開館、翌1月10日休館）

年末年始（12月28日～平成18年1月4日）

入場料：一般500円(400円)、高校・大学生250円(200円)、中学生以下・65歳以上・障害者手帳保持者／無料（ ）内は20名以上の団体料金

<関連事業>

1 木管五重奏コンサート

演 奏：千葉アンサンブルムジカ
日 時：1月14日(土) 14:00～15:00
会 場：千葉県立美術館 講堂
参加方法：当日先着200名（参加無料）

<その他関連事業>

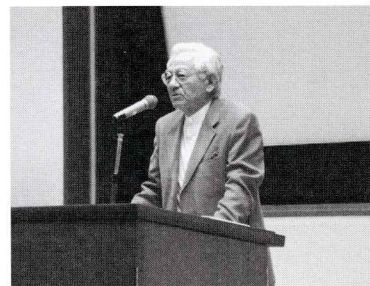
企画展に関連し、以下の事業を開催いたしました。

1 美術講演会：「我が師・陶芸家 宮之原謙先生」講師：會田雄亮氏（陶芸家・東北芸術工科大学名誉教授）
12月3日(土)、千葉県立美術館講堂。

2 ミュージウムコンサート：「歌とピアノ三重奏による名曲の調べ」～星と月に寄せて～
演奏：ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉、12月10日(土)、千葉県立美術館講堂。

3 龍笛の調べ

演 奏：平井裕子（雅楽演奏家）
日 時：12月17日(土) 14:00～15:00
会 場：千葉県立美術館 第7展示室



美術講演会（12月3日）

「アート・コレクション50」より フォンタネージ《十月、牧場の夕べ》

本館では、開館以来浅井忠を中心とした作品の体系的な収集をめざしてきた。その中でも、浅井が工部美術学校で学んだフォンタネージは、収集の重要な作家として位置づけ、現在11点の作品を収蔵し、東京国立博物館、東京芸術大学大学美術館と匹敵するコレクションとなっている。

この作品は、サルディニア王国を建設し、19世紀にはイタリア独立運動に大きな役割を果たした北イタリアの名門「サヴォイ家」に所蔵されていたものである。

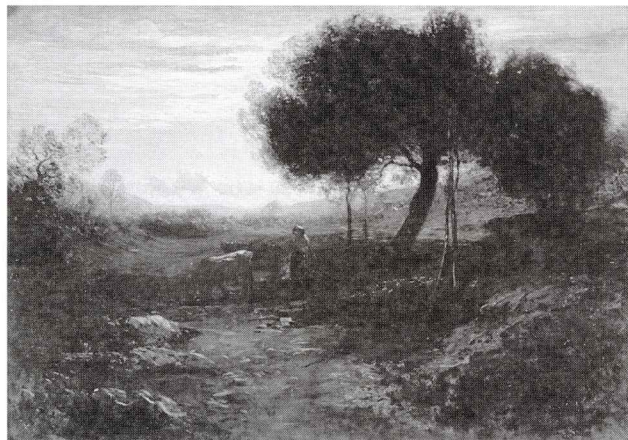
1947年、フォンタネージの研究家であるマルツイアーノ・ベルナルディ監修の『アントニオ・フォンタネージの50の作品』展（トリノ、ガゼッタ・デル・ポポロ画廊）に出品され、はじめて世に紹介された。

陽が落ちようとする牧場。残照が木々の影を映し、日陰にはひとりの少女と二頭の子牛が佇んでいる。その陰影部分とたっぷり光を含んだ雲と山なみの明るい部分とが、画面に見事なコントラストを生み出している。

残照を背にした遠景の木々は、コローを思わせる銀緑色である。中景から前景は主に脂色と黒色で構成しながら、白色により僅かな光を表現している。画面全体はエナメルのような色彩の質感をもち、また厚い平坦な絵具の層で仕上げるために、所々パレットナイフで削り取っている。その趣きは、バルビゾン派の流れに沿いながらも、ロマン主義の伝統を汲む憂鬱と抑制のある種のムードを漂わせている。しかし、どのエコールにも属していない。フォンタネージは、風景画を描くのに、自然を見つめ、自然のリアリティを追求する以上に、自らのすべての感情と経験を移入した。それ故に、バルビゾン派のように、農民の貧しさや苦しみを主題とすることはなかったし、ロマン主義のように、伝奇的、空想的に陥ることもなかった。彼の作品には、常に峻厳で、孤独で、禁欲的な雰囲気が支配している。これは、幼くして父親を亡くし、独立戦争への参加という現実の経験から生み出されたものであるに違いない。

この他、本館のコレクションには、日本滞在中に工部美術学校の新築校舎の装飾の画稿として描き、浅井忠の旧蔵であった《神女之図》（木炭・赭チヨーク）をはじめ、油彩7点、パステル2点がある。そのうちパステルは、日本での制作と考えられる。

（前川公秀）



フォンタネージ
(1818～1882: Antonio FONTANESI)
《十月、牧場の夕べ》1860

こども向け普及事業の報告とお知らせ

《ワークショップ》

こどものための楽しい創作体験教室を開催し、保護者などの大人も一緒に参加して楽しみました。

第1回：「ウォールペイント・ロックペイント！」

5月14日（土）（参加者184人）

第2回：「県民の日スペシャルワーク・いろいろ作っちゃおう！」6月18日（土）（参加者113人）

第3回：「ゴンドラ型飛行船を作ろう！」7月16日（土）（参加者69人）

第4回：「モノレールを楽しもう！小さな美術めぐりの旅」11月26日（土）（参加者25人）



第1回ワークショップ

《むじゃキック》

展覧会と関連した創作体験を開催し、「作品鑑賞」と「創作」の両方を楽しみました。

○第1回：アート・コレクション「ガラスの彩り」関連イベント

「きらめき彩り・ガラス絵に挑戦！」

6月4日(土) (参加者105人)

○第2回：アート・コレクション「石井雙石」関連イベント

「芸術の秋・スタンピングコレクション！」

9月10日(土) (参加者67人)



第1回の様子

＝これから開催予定のむじゃキック＝

○第3回：アート・コレクション「書の美」関連イベント

「墨と遊ぼう・墨っ子星人あらわる!？」

2月11日(土)

実技講座

金工講座

内容：銅板レリーフと彫金の制作を通して、各種工具の取扱い方を学習するとともに、金工の基本的な技法を修得する講座です。

日程：1/17(火)18(水)19(木)20(金)24(火)25(水)26(木)27(金)31(火) 2/1(水)

講師：小林正利先生、定員：18名、費用：14,000円、締切：1月6日(金)

篆刻講座

内容：陶印を通して、篆刻の魅力を堪能し、基本的な技法や用具の取り扱い方を修得する講座です。日程：2/14(火)15(水)16(木)17(金)18(土)28(火)

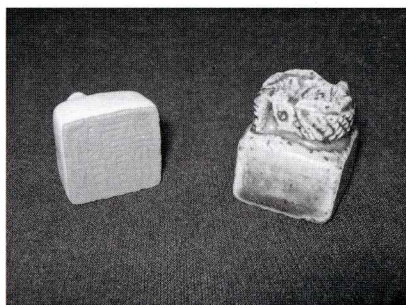
講師：細谷恵志先生、定員：20名、費用：10,000円、締切：1月29日(日)

各講座の活動時間

12:30～16:30 (初日は13:00受付)

申込み方法 往復はがきに、講座名、住所、氏名、電話番号を記入のうえ、ご応募ください。(締切日必着)

なお、定員を超えた場合は抽選となります。



美術館講座

美術館の社会的な役割や学芸員の仕事の習得を通して、美術文化に対する関心を高め、生涯にわたって美術を愛好する心を醸成するため、千葉県立八街高等学校との連携を図り「美術館講座」を開講しています。

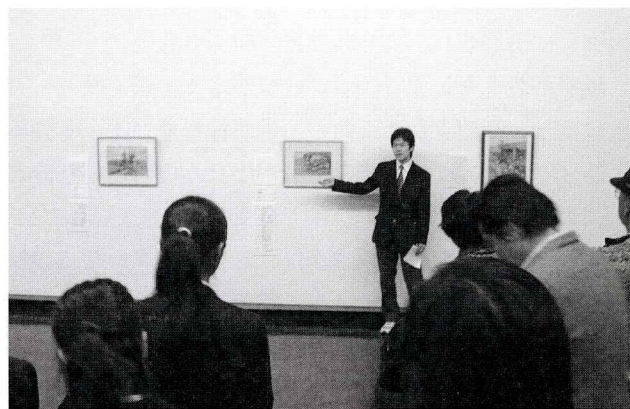
この講座は、八街高等学校総合学科の教科科目の拡充を図るため、年間を通して「授業単位」を取得できる画期的な博學連携事業です。1年間の集大成として「美術館講座」受講生による展覧会を開催します。是非ご来館いただき、ご鑑賞ください。

展覧会名：「浅井忠とバルビゾン派の作品展

～高校生生の解説～」

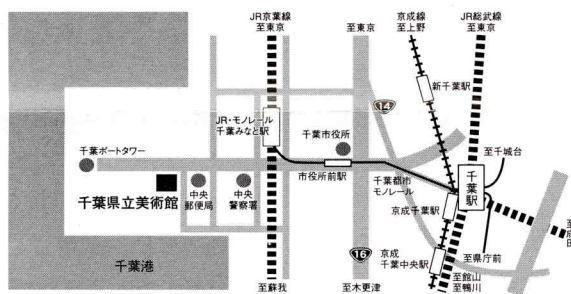
会 期：平成18年1月13日(金)～15日(日)

解 説 日：平成18年1月15日(日) 14:00～



写真は昨年度の、生徒による会場内解説の様子

交通



JR京葉線・千葉都市モノレール 「千葉みなと駅」下車徒歩8分
JR総武線 「千葉駅」下車東口12番バスのりばから「千葉ポートタワー」行「県立美術館・中央郵便局」下車徒歩1分
〈東京方面から〉東関東自動車道「湾岸習志野」I.Cから約20分
〈成田方面から〉東関東自動車道「千葉北」I.Cから約25分

〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1

電 話 043-242-8311

<http://www.chiba-muse.or.jp/ART/>